

私がなぜ現在の科目を選んだか

「児童精神科」

信州大学医学部附属病院精神科

村上 寛

私は、現在精神科に所属し、成人精神疾患と児童精神の両方の勉強をさせて頂いております。昨年までは8年間、順天堂大学小児外科に在籍し、寝る間を惜しんで自分なりに一生懸命子どもの手術に携わりました。小児外科医としての濃厚な時間の中で、数多くの「恐らく」発達障害の子ども達に出会いました。しかしながら、自閉スペクトラム症や注意欠如・多動症と呼ばれる疾患の特徴的な行動が見られる子どもであっても、「自分は小児外科医なのだから」と言い聞かせ、淡々と手術を遂行し、子ども達のそういった特性には目をつむっていました。そんなある日、救急外来に陰嚢外傷の子どもが来院されました。当直であった私が緊急手術を行いました。幸い精巣本体に損傷は認められず、洗浄と陰嚢縫合のみで手術を終え、術後問題なく退院

私がなぜ現在の科目を選んだか

「消化器外科」

信州大学外科学教室 消化器・移植・小児外科学分野

安川 紘 矢

「剣道の世界と外科の世界は似ている」、大学5年生の実習の時にそう思いました。

私は物心ついた時から剣道を嗜み、現在に至るまで剣道を軸に生活していた、といっても過言ではありません。各師範代に教えていただいたこととして最も大事にしているものは「剣道は鏡であり、生活が剣道に出て、剣道が生活にでる」というものです。当時はまるで理解できず、ただひたすら苦しい鍛錬に励む毎日でしたが、なるほど年を重ねるほどその通りでありまして、生活の乱れは必ず剣道に現れ、逆もしかり。

さて、剣道は1試合約4分で終わるといっても短い中で自分の成果を発揮する特徴があります。その集中力たるや、周りの音などまるで入らず、時間がたつのも忘れてしまいます。これは手術と同じであり、気の遠くなるような勉強や手技習得のうえに挑む手術は10時間かかろうが20時間かかろうが、剣道の4分と同

されました。退院後の外来では創部には全く問題を認めませんでしたが、本人が、「退院してから歩く時に脚が痛い」と言いました。最初は問題視をしませんでしたが、日にちが経つにつれ歩けなくなり、ついに車椅子生活となってしまいました。陰嚢を縫合した立場としてはかなり焦りました。様々な精査にて身体的な原因は認められず、小児科にコンサルトしたところ「身体表現性障害の疑い」と診断して頂きました。身体表現性障害とは、辛い体験を経験するとその体験から自分を切り離そうとするために起こる反応のことで、人によって様々な症状が出現します。診断後、小児科に治療をして頂き、幸い本人は徐々に歩けるようになり、その後問題なく登校することが出来るようになりました。私はこの経験を経て、児童精神に強く興味を持ち、勉強したいと考えるようになりました。専門医まで取得し、小児外科を離れることについては本当に悩みましたが、子どもを「心」と「身体」の両方から診ることの出来る医師になりたい気持ちが強く、松本に移住することを決意致しました。自分なりに精進したいと考えております。(順天堂大学大学院平28年卒)

じなのです。命を扱う手術ならではの緊迫感、外科でしか経験することのない緊張感と達成感、これは一生をかけて研鑽を積むに値するものであり、生半可な覚悟無しにはやっていけないと思いました。これが私が外科医を目指した大きな理由になります。

話は変わりますが、世界での死亡原因の1位は虚血性心疾患、2位は脳血管疾患であるのに対して、日本では「悪性新生物」が1位に名乗りを上げています。これは各国の生活水準や環境に依存しているものと思われませんが、日本では「悪性新生物」、すなわち「癌」による死亡が最も多いとされています。実際に生涯で癌に罹患する確率は現在、2人に1人とされており、さらに死亡数が多い順に肺・大腸・胃・膵臓・肝臓と、消化器外科分野が4つもランクインしています。化学療法や免疫療法が進歩してきたとはいえ、これらの癌の唯一の根治療法は、やはり外科的切除のみであり、いろいろな意味で癌と外科は切っても切り離せない関係にあるといえます。

当科は皆さまご存じの通り多忙を極めておりますが、その分充足した毎日を過ごしております。この一日一日が将来のConquer cancerにつながると信じ、毎日を精進して参ります。(旭川医科大平27年卒)